

## (2) 地方都市における 1 歳 6 ヶ月児歯科健康検査時のう蝕所有者についての検討

飯塚 喜一（神奈川歯科大学口腔衛生学教室）

原 康二（ ” ” ）

安彦 良一（ ” ” ）

昭和 53 年 4 月から 54 年 8 月までの神奈川県三浦市における 1 才 6 ヶ月児歯科健康診査では、被検者数 677 人（男 357 人、女 320 人）で、そのうちう蝕所有者は 93 人（男 57 人、女 36 人）であった。とくに、う蝕所有者 93 人について、罹患状態および生活状況を検討し、そのう蝕感受性および管理方法などについて考察してみた。

う蝕の罹患状態では、一人のもつう歯数は大部分 1 ~ 4 本程度であり、6 本以上のう歯をもつものは 93 人中 10 人である。また、その広がりをみると、上顎前歯部のみにう蝕をもつものが 75% であり、ほとんどが軽度のう蝕である。生活状況のアンケートからでは、う蝕所有者では間食は時間を決めないで与えるものが多く、また、ジュース、乳酸飲料をよく飲むものが多いようである。健診からでは、う蝕所有者の歯の汚れは“きたない”ものの割合が高く、“きれい”なものとの割合が低くなっている。

以上まとめてみると、1 才 6 ヶ月児歯科健康診査時のう蝕所有者は、家庭で間食を欲しがるままに与えられ、また、歯磨きがなされていないために早期に罹患したものと思われる。したがって、個人のう蝕感受性を判定するには、これらの生活状況を考慮することが必要であると思われた。

上期の疾患障害の発見と、それに伴う適切な指導、進行の未然の防止などの目的をかけたスタートした 1 才 6 ヶ月児健康診査ではあるが、歯科分野からみるとその多くは、う蝕歯の発見にとどまり、将来のう蝕罹患傾向の予測などについては、かなり難しい問題となっている。それは 1 才 6 ヶ月児健康診査は、一断面を観察することに起因しているものと思われる。

う蝕は、生活習慣と密接なかかわり合いをもつ疾患であり、その抑制は家庭での生活に負う所が大きい。断面的な保健活動では、それが生活習慣の中まで浸透していくのは難しい。したがって将来、1 才 6 ヶ月児歯科健康診査は、最初う蝕罹患型傾向を知るためのスクリーニングとして活用させるべきものであり、それに続く有効な管理体系が必要となってくる。今後さらにその管理体系の確立のために検討を続けていきたいと考えている。

(付1) 1才6か月児歯科健康診査結果

	被 檢 者	う蝕保有者
男	357(人)	57(人)
女	320	36
計	677(人)	93(人)

(昭和53.4~54.8まで)

(付2) う蝕保有者の生活状況 (93名中)

主な養育者	父 母	74(人)
	祖父母	17
	その他	2
よく飲むもの	牛 乳	45
	ジュース、乳酸飲料	35
	どちらも	12
哺乳瓶	使用しない	56
	使用する	36
おやつの与え方	時間を決めて	23
	時間を決めないで	70
歯の汚れ	きれい	2
	ふつう	39
	きたない	28

(付3) う蝕発生部位 (93名)

上顎前歯のみ	71(名)
下顎前歯のみ	1
上顎臼歯のみ	1
下顎臼歯のみ	2
上顎前歯と上顎臼歯	6
〃 〃 下顎臼歯	2
〃 〃 下顎前歯	5
上顎前歯と上・下顎臼歯	3
上顎臼歯と上・下下顎前歯	1
下顎前歯と下顎臼歯	1

## ↓ 検索用テキスト OCR(光学的文書認識)ソフト使用 ↓

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昭和 53 年 4 月から 54 年 8 月までの神奈川県三浦市における 1 才 6 か月児歯科健康診査では、被検者数 677 人(男 357 人、女 320 人)で、そのうちう蝕所有者は 93 人(男 57 人、女 36 人)であった。とくに、う蝕所有者 93 人について、罹患状態および生活状況を検討し、そのう蝕感受性および管理方法などについて考察してみた。